

令和2年度第3回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日時：令和3年3月4日（木）13:30～15:30

2 場所：オーテピア 4階ホール

3 出席者：

【委員】加藤委員長、篠森副委員長、齋藤委員（リモート）、常世田委員（リモート）

【意見交換会各分野の代表者】

「商工・農林水産分野」

特定非営利活動法人こうち企業支援センター 理事長 田村 樹志雄 氏

「中心市街地活性化への寄与・周辺施設との連携分野」

株式会社高知商工会館 常務取締役（まちゼミ実行委員） 中西 美喜雄 氏

「健康・福祉分野」

高知市健康福祉部健康増進課 係長 中山 由子 氏

社会福祉法人高知市社会福祉協議会 地域協働課長 竹島 直孝 氏

「防災分野」

高知市防災対策部防災政策課 課長補佐 植田 耕太郎 氏

【オーテピア高知図書館】山崎高知県立図書館長、森岡高知市立市民図書館長（ほか）

4 議事次第

(1) 開会

(2) 委員・各分野代表者紹介

(3) 議事

ア 報告

① 『オーテピア高知図書館サービス計画』の取組状況について

② 『オーテピア高知図書館サービス計画』意見交換会での主な意見

イ 協議

- ・ （仮称）『オーテピア高知図書館サービス計画』（第2期）の骨子案（たたき台）について

ウ その他

【委員】

早速、骨子案に対する意見をいただきたい。名簿順に意見をいただき、必要があれば事務局から回答をもらう。

【委員】

最初に一つ確認するが、先ほどの説明で、「司書が取組を決めた」という話があった。当然のことながら、図書館というのは公共施設でもあり、県政なり市政、そういった視点でのニーズが優先される。それとあわせて、具体的にどういうことをやったらいいのかを司書が考えていると思っている。その点で、今日、ここに挙げられてる項目等については、両館長ともよく吟味された上で、納得されているということでしょうか。

【事務局】

県の課題、市の課題については、もちろん県の計画、市の計画をきちんと理解している。例えば、直近の課題であれば、議会の知事提案で課題をきちんと説明しており、そういうものも把握したうえで、それぞれの担当が図書館としてどうするのかを検討している。

もちろん、私も市の館長も、あと各チーフ級以上も集まり、サービスごとに館内でヒアリングをして、いろんな意見を交わしながら今回の資料を取りまとめている。

【委員】

そうだろうと思い、あえて聞いてみた。そこでまず、図書館そのものをどう捉えるかという話からになる。私が思っているのは、やはり、その地域なり、そこに住む人に対して、あらゆる分野でサポートをすることができるということが、一番大きな図書館の力だと思っている。

委員と一緒に「これからの図書館像」というのを文部科学省で検討していたときに、私は、文部科学省の管轄じゃなくて総理府とかそういった全体を見回す官庁が図書館を所轄すべきだと言ったことがある。あくまで教育施設として置いてあるが、今日出席いただいている皆さんのように、例えば、ビジネスだとか地域おこしだとか、あるいは保健・福祉、それから防災、さまざまな分野で、図書館は地域に対して、人に対しての貢献ができる。

それから、そういった団体なり個人なりが単体でできないことを図書館が中心になっていろいろ動くことで、よりスピーディーに、あるいはより良いかたちでフィードバックすることができる、そのようなシステムだということを踏まえたうえで、ここから先話をさせていただきたい。

まず一つは、全体を読んで、「高知モデル」がだんだんできてきた、良くなってきたという印象を持つ。当初は、県と市が一緒になってやるということに対して危ぶむ声があった。私自身も、「一緒になったときに県立の仕事はどうなるか」といった懸念を言ったこともある。

ただ、その点について言うと、調整という意味では手間がかかっているかもしれないが、各部会ごとに県レベル、それから市町村レベル、両方からのニーズをあわせて聞いて、それを両方の図書館で協議しながら県民、市民に提供できるということは、大きなアドバンテージだと思う。

そうしたことは、実は他の県では、県立と市立がうまく調整しながら、全体を見て動いているかというところ、そんなところはまずない。

そういう意味で考えると、今の高知のモデルはどこでもできるとは言わないし、難しいこともあるけれども、こういう形だからこそできることもあるんだということが示せる場でもあると思う。

そういった地域のニーズの中に、例えば弱者をつくらない、情報弱者をつくらないということがある。次期計画の中に、学校に関するものが入っている。情報弱者をつくらないということと言うと、今社会にいる人たちが図書館を利用できるようにするというかたちも当然あるが、先のことを考えると、高知県に生まれ育った人たちは情報弱者に

はならないシステムが、両図書館の協力によってできあがっていくことになれば、誠に結構だと思う。今現在多分そうはなっていないと思うし、それぞれの学校でずいぶん取組の差があったり、それからサポートにしてもまだまだ緩いところがあったりすると思う。

そういう点で、幼稚園、保育所からはじまって高校卒業まで、情報弱者をつくらないように高知県にいる間にどのように育てていくのかということ、県、市の両館、それから教育委員会等とも話し合う。それとあわせて、学校への訪問も今までよりも回数を増やすなり、あるいは館長自ら出向いて、必要な場合には説得するなり、そのようにやっていくことも考えていただきたい。

そうすると、当然、学校側からのニーズも出てくる。学校からのニーズは子どもだけではなく、先生方も必要な情報を県立、市立の図書館からどんどん送ってもらえれば安心感を持って教育ができる、そういう環境ができてくるとよい。自己責任対応ということ言えば、図書館は最後の砦になり得るが、そのように思っていない人がほとんどである。

それを、高知県では、「最後は図書館に頼るといろんな形でサポートしてくれる。情報提供だけじゃなく、例えば人も紹介してくれるし、相談する場所も紹介してくれる」ということを、成人するまでにきちんと理解しておいてもらえば、情報弱者、社会的な弱者になることを防げる。それから、自殺の話があったが、そういったことを防ぐという意味でも、非常に意味のあることだと思う。

そのためには、当然のことながら、必要な書籍だとかデータベースだとか、いろんな物が必要になってくる。それには、県の場合でいくと約1億、市のほうもかなりの予算額を確保しているから、そういったものをしっかり確保していくなかでうまく配分していきながらやっていくことを考えていただきたい。

それから2番目は、リテラシーの問題で言うと、図書館が直接関わる、例えば、ビジネスの関係者にビジネスに関するリテラシーを提供するのはもちろん必要だが、直接の関係者だけでなく、県立図書館、あるいは市民図書館はこういうことをやってくれているということを知らしめる意味でも、とっつきやすい漫画だとか、紙芝居だとかを利用しながら、図書館をアピールしていく。リテラシーを育てていくことは必要だと思う。

それから、次に、地域のアドバンテージという意味で言うと、コロナもあって今、移住だとかテレワークだとか、そういった言葉が飛び交うようになっている。そうした場合に、やはり選ばれる場所と選ばれない場所がある。高知は選ばれる場所になれるだろうかということ言えば、一つの柱として、図書館があるということが確立できてないといけない。県民から見ても、オーテピアは、これだけいろんなことをやってくれるところであり、あそこに行けばいろんな情報をもらえるということを知ってもらわないといけない。そういったことが、外から来ようとする人たち、あるいは一時的にでもテレワークのような形で高知で働くような人たちが、頼りにするようになるところがあれば、それは地域にとっての大きなアドバンテージになる。

これから先、地域は選ばれるところと選ばれないところが明確に分かれてくる。そのときに、選ばれる材料の一つとしてオーテピアがあるということは、非常に重要なことだと思う。

やはり都市部から移ってこられる方は、仕事のうえでも、情報が本当に的確に入って

くるかということを心配する。あるいは、一方で教育という面、それから自分たちが自ら学ぶという意味合いでも、都市部の良い図書館があるところから移住されようとする方は、大概、図書館がどうなんだろうかと思われる。鳥取県は、そういう方には一生懸命サポートすることによって鳥取県内への移住を応援しているし、それを評価してくださってる方もいる。高知にもぜひそうなってほしいと思う。

それから、行政に対するサービス、あるいは行政からの認識はとても大事だと思う。鳥取県の場合は、県庁内図書室をつくってからかれこれ15年ぐらいになる。図書館は県庁のすぐそばで、オーテピアと高知県庁、高知市役所との距離よりももっと近いが、それでもやはりなかなか使ってくれないから県庁内図書室という形で「出城」をつくって、そこからさまざまな情報提供サービスをやることによって、公務員の仕事の質の向上を図ってきた。

なかなかそこまではいかないと思うが、研修の充実とか、そういったやり方、トップの方から攻めていくというやり方もある。それから、そういう情報に対して敏感に反応する人たちに、いかに図書館が使えるのかということを深掘りして研修を行うなど、いろんな方法で啓発して使ってもらう。使えば絶対に図書館は役に立つ。例えば同じ一つの仕事をするのも、オーテピアからさまざまな資料をしっかりとらったうえで、企画するならば、無駄な時間が省けるし、その中の最適解を見つけることも比較的容易になってくると思う。

逆に言うと、公務員で、これだけの図書館があって使えるのにそれを十分に使いこなしていないのは怠慢だと思う。だから、館長を務めて以降は、一定のことを企画で出してきたときに、「これはどういう資料で調べたの」と聞いて、資料が十分でないときには、「はい、差し戻し。一回その資料を見て来なさい」というようなことをやっていた。無駄な時間を省いて、本当に良い仕事しようと思ったら、やはり図書館を使うというように、県庁、市役所をもっていついていただきたい。それは図書館だけでできることではなく、当然のことながら組織だとか人事だとか、そういったセクションと話をしながら進めていくことになるだろうと思う。

それから、高校生のボランティアのことについて、もっと積極的な高校生たちの、あるいは中学生でもいいが、オーテピアをアピールするボランティア活動みたいなものができればいいと思う。その参考として、北海道のある県立学校では、高校生たちが図書委員になっているんな図書館のアピールを動画なども含めて作成して、それもあって非常に図書館の利用率が高いという例がある。同じ年代の人たちがアピールするのは効果が高いし、それから高校生や中学生たちがそういう活動をやってくれているということであれば、マスコミもきちっとそれを取り上げてくれる。それをもって、図書館に対する親近感を県民、市民の方が持ってくださいと思う。

それから、市町村と学校への訪問について、学校については先ほど言ったが、県立図書館の市町村に対する訪問はもっと手厚くてもいいと思う。ただ、手厚いというのは全部に同じだけする必要はないと思う。やはり、前進する気概のあるところ、そういったところにはできるだけ手厚くやり、そこがどんどん伸びていくための支援をし、高知ではまだまだ市町村図書館が伸びてない現状があるから、そういった形でモデルになってくれるようなところを育てていくことで、高知県圏域全体の市町村図書館が伸びていく

方策を取らざるを得ないのかと思う。

鳥取県は、今、全市町村に図書館があるが、今言ったような活動をかれこれ 20 年ぐらいやっている。結構時間がかかるが、最終的な目標として、県民、市町村民が図書館の恩恵を受けるということであれば、県立だけではそれは無理なことであって、市町村立図書館を何とかしなければいけない。そういうことと言えば、そういった市町村への訪問を含めたサポートの手厚さ加減は、差がついてもいいから、伸びるところを伸ばしてあげてほしいと思う。

【委員】

これから非常に重要なポイントは、やはり地方間競争だと思う。どこに行っても代わり映えのない行政ということではなく、これから本当に自己判断、自己責任ということに自治体の単位でも直面するわけで、それをどうやって担保していくのかと。つまり、国や県から答えは降りてこないの、そこが重要なところだと思う。

そのときに図書館がどうするかということが、今回の計画の非常に重要なポイントになると思う。新しい図書館をどうするかといった議論をしているときに、新しい技術を導入しよう、それからビジネス支援だ、というようなことが頭に入りかけるが、会議の場から離れ 1 週間もすると、図書館のイメージというのはどうしても子どもと絵本、高齢者、小説を貸してるところ、本を貸すところとなってしまう。先進国では非常に珍しいことだが、日本人の図書館に対する強固なイメージをどうやって打破していくかということが、大きなポイントになると思う。

だから、子どもだとか小説の類というイメージは、つきまってくるわけで、バランスをとるためには、計画の構成にそのバイアスをかけていかないとバランスがとれない。だから、全うにいけば（資料 6-1 のサービス・取組の体系のうち、3 利用者に応じた図書館サービスの充実について）1、2、3、4 という順番でおかしくないが、しかしそれでは従来型の図書館のイメージがまた強化されてしまう。だから、意識してこれから図書館の取り組むべきことを優先的に PR していく戦略が必要になると思う。

各章の記述はずいぶん分かりやすくなったし、練れてきたと思う。最も大きなポイントとしては、日本で初めての県、市が一緒になった図書館ということで、私も当初は、当時の県の教育長に真っ向から反対をした。しかし、その後、いろいろ考えていくときに、アメリカの図書館は各自治体で図書館運営をしているという例はほとんどない。ほとんどがカウンティ単位となっている。カウンティは、だいたい日本の都道府県と同じくらい。その大きな自治体の図書館が、カウンティ単位の図書館システムの中央図書館を兼ねている。まさに高知の県、市図書館というものに非常に近い。日本のほとんどの図書館は県立図書館と市立図書館が二重行政を行っている。県、市が一緒になることによって、逆に県立の役割と市立図書館の役割がはっきりするということが、今回の大きな眼目であった。そのことが、役所の中ではかなり明確になっているし、実際これまでの実務のなかでもある程度の効果が上がってきているのではないかと思う。

私が主にお話したいのはやはり順番。さっきお話したような、日本のどうも陥りがちな図書館のイメージを払拭するために、意図的に順番、構成を考えなければならない。今までの順番だと、（資料 6-1 のサービス・取組の体系について）1-(1)は情報の提供

ということで一番重要な方針になる。その次に、高知県関係資料の収集がきてしまう。これは、歴史のある土地柄であり、地域の資料を重視されるのは分かる。いろいろ事情があってどうしても二番目ということであれば、それは致し方ないが、私は、これは少し後ろに回して、2のビジネス、そして健康・医療、そして行政支援といったものが次にくるべきであろうと思う。それを実現するために、1-(3)のリテラシー向上支援がくるという順番が適当ではないか。

今日はいろいろなお立場の方がいらっしゃっているので、少しお時間を拝借して、短い映像を見ていただきたい。私が下手な話をするよりは、分かっただけだと思う。もちろん、皆さん十分理解いただいているとは思いますが、一緒に考えてみたいということで短い映像を共有させていただく。

《映像の共有》

【委員】

貴重な時間を拝借したが、いかがだったか。日本の従来の社会は、行政も産業界も非常に中央集権的な組織で維持されてきた。それが、明治維新以降、特に戦後経済面では大成功したわけだけれども、縦割りであり、業界のなかでは情報が行き渡っているけれども、そこから外れると必要な情報が行き渡らない。つまり、横串の情報流通がないということであり、他の分野では既に解決されているようなことが、別の業界では課題になっているなどということがある。

図書館は、まさにその横串を通すという機能がこれから必要とされる。そのようなイメージで考えることが必要と思う。こういうことがなかなか理解してもらえない。私は、計画としては先ほど話したような順番に組み替えることが必要ではないかと思う。

今見てもらったように、膨大な資料が図書館から提供されているというシーンがあった。商業支援とか中小企業支援をやる時、支援するセンターとか機構とか、いろいろあるが、そこでは、いわゆる会社経営とか補助金についての情報だとか、そういうことは潤沢にある。しかし、実は商材そのものについての情報があるわけではない。多様な商材について、つまりサービスだったらサービスの種類、物品だったらそのものについて、あるいは、それについてのトレンドだとか世界の状況だとか、そういうものが具体的に支援センターにあるわけではない。ここが、実は図書館が具体的に寄与できる点である。

さきほどのビデオで出てきた方は、本来、防災の専門家ではなく、医療関係の会社の営業マンだった。その方が全く違う分野で会社を立ち上げて、そして今、台風が激甚化していることもあり、業績が順調に伸びている。

そのようなことが図書館によって可能になった。会社を立ち上げるときの資金も、国民金融公庫の担当者につないだのは図書館だし、デザイナーを紹介したのも図書館。こういった具体的な例を挙げてPRをしていくということは、非常に重要だと思う。まさか図書館が金を借りるところの担当者を紹介してくれるとは、ほとんどの市民は知らない。商品のデザインをするデザイナーまで紹介してくれるとは、想像する方もなかなかいない。こういう具体的なPRの手法を考えていくということが重要だろうと。そうい

うことも含めて、この計画のなかに組み込んでいければ、本当に素晴らしいと思う。

【委員】

一つは、新しいサービス計画をつくるということで、やはり理念について。「これからの高知を生きる人たちに力と喜びをもたらす」という理念を掲げている。力と喜びをもたらすにはどうすればいいか。第1期計画の策定にも携わったが、その時点では、まだ図書館がなかった。例えば、図書館の役割というものがある意味、明確に出ていた。それは、例えばレファレンス・サービスとかパスファインダーの作成とか、それからレフェラル・サービスとかであった。

今回、情報リテラシー支援が新たに一番に、地域を支える情報拠点機能の充実とともに入ってきたが、今、両委員が言ったことは、今のままではなかなかそこまでいかないと思う。それは何かと言うと、情報を取りに来るのは、あくまで利用者だということになる。

私個人としては、第2期ではさらに情報の「ディストリビューション機能」を検討してほしい。これが、委員の言い方だったら「横串」ということになるかもしれない。これは、旧来の図書館ではなかなかできないと思う。要するに、情報は良いものと悪いものがある。これは明確であり、8万冊の中から4万冊を仕入れれば、4万冊すべてが名作かと言われるとそんなことは決してない。

自分の今の勤め先から言うと、それをガイドするのが先生となる。これを読めば大丈夫だというのが非常に喜ばれ、それが教育的に非常に効果がある。図書館が情報の取捨選択をするのは、やっていいのかという問題もあるが、先ほどの委員の話にもあった、地域としては選ばれるか選ばれないか。もっとどぎつく言うと、勝つか負けるかしかない状況で、「図書館に来れば100万冊ございます」と言っても、それをすべての県民が一樣に活用するという事は難しい。そろそろ、ディストリビューターとしての機能を検討いただきたいと思う。

それと、今の話とも関連し、両委員の話とも関連するが、せっかくいろんな分野から代表者に来ていただいている。ビジネス、農業・産業支援、健康・安心・防災、行政支援とかいろんな分野で、地元の皆さんにおいでいただいている。それぞれが、「うちがこれができます」ということでやっていて、図書館が紹介するという事だが、横串というか、相互の連携というのはなかなか難しい。そのことについて、協力いただいている他の分野、例えば、防災とか、福祉とか健康とかでも、この県、市の一体化というか、連携というか。例えば、県の壁、市の壁があり、それを乗り越えた情報の発信ができれば、本当に図書館自体を県、市が共同で運営しているということを体現できている。地域を支える情報拠点機能の充実の中で、ぜひ次のステージを検討いただきたいと考える。

【委員】

ありがとうございました。意見交換会の各分野から代表の方に来ていただいている。例えば、ご要望の反映具合、その他についてコメントをいただきたい。

【分野代表者】

経営支援の分野で活動している。コロナ禍で経営環境が非常にドラスティックに変わっていて、その風に対して追い風の吹いている業界もあれば、ほとんどが向かい風を受ける事業所が多い。その風をどう読んで、どういうふうに対応していくのかということと一緒に考え、日々悩んで、悩みつつも答えを出しながら進んでいくという毎日を過ごしている。

そういうビジネス関係者も含めて、まず人間のそもそもの根本の行動様式というか、行動メカニズムは、やはり情報収集からはじまる。情報収集からはじまり、判断をしてこういうふうにしていくという基本的なメカニズムがあると思う。そこに、我々ビジネスに関わる人間は、特に限られた時間という制約条件がある。限られた時間でいかに情報収集をして、それを単に情報収集したままで判断するわけではなく、収集した情報を整理し、それで経営判断につなげていく。限られた中で、いかによく整理をしてより優れた判断していくのか。ここが、特にビジネスの世界では肝になってくるかと思う。

そういう意味で、このオーテピアができて3年目ということだが、これまでの3年間に大変お世話になっている。ビジネスレファレンスもそうだが、土佐MBA、土佐経営塾の受講者に、「オーテピアをぜひ活用して、ビジネスの調べものをしてください。こんな頼れる司書さんがいます」ということを伝えている。

これまでの意見交換会での意見を踏まえて、伝えたいことが2点ある。1点目は、情報リテラシーの向上支援に関連し、第2期計画のポイントとして、図書館司書の専門性を生かすということがある。

オーテピアで、実は一番大きな価値をつくっているのは職員の司書ではないかと思う。私はある程度この司書の顔を知っているが、ほとんどの方はどういう司書がいて、どういう専門性があるのかを知らないと思う。

そういう意味で、「顔の見えるオーテピア」ということをぜひ標榜し、こういう人がいるからここに相談しに行こう。行政の司書なので、そのままオフィシャルに顔を見せていくというのはなかなかできないかもしれないが、例えば、非公式な情報とかで結構だが、オーテピアにはこんな司書がいる、こんな専門性を持った司書がいるということ、我々も協力するので、ぜひ周知する努力をしていただきたいと思う。

そのためにも、その専門性をPRし、顔を見せていくためには、やはり司書の人材育成は欠かすことができないと思う。司書の人材育成にかかる費用はぜひぜひ厚めに積んでいただき、ぜひ司書の専門性を生かす、あるいはコミュニケーション能力の向上など、さらなる魅力のある司書になっていただきたいと思う。

もう1点は、セレンディピティ。外山滋比古さんが、『乱読のセレンディピティ』という有名な本を書いているが、セレンディピティというのは、素敵な偶然の出会いだったり、予想外なものを発見するということ。このセレンディピティが、図書館にはやはり必要な要素だと思う。今でも十分に資料がたくさんあるが、さらなる資料の充実を図り、このことを調べてきたがその隣にはこんないい本があったというように、ぜひこれからも充実をしていただきたいと思う。そういう意味で資料のさらなる充実、セレンディピティを確保していくためにも、ぜひそこはお願いをしたい。

【委員】

ありがとうございます。読書の楽しみは、やはりセレンディピティかと思う。

【分野代表者】

中心市街地活性化への寄与ということで、参加をさせていただいている。

高知県全体でそうだと思うが、人口減少、それから少子高齢化、こういった問題にどう対処していくのかというのを商店街でも考えていかないといけないと思う。その中でも、中心商店街の果たす役割を見直していかないといけない。これは、働き手の減少とか消費人口の減少につながっていく。そういうことに、どう対処していくかという中で、以前から、学生も含めて、若い人、特に若い家族連れに商店街に来ていただきたいとずっと思っていた。今、高知市の商店街には、おもちゃ屋さんがない。それから、映画館もなくなった。高知城歴史博物館はできたが、美術館は郊外に出ている。

若い世代とか、子ども連れの世代が商店街に来る理由がない。それで、次世代を担う若い方が商店街に来ていただきたいといっても、食事をしに来るぐらいしか理由がない。若い世代が商店街に来る理由を何かつくりたいとずっと思っていた。

そのなかで、こういった施設としてオーテピアをつくってもらい、絵本とか児童図書とか、非常に充実している。家族連れや若いお母さん方がほしいような雑誌とか、情報・資料をいっぱい準備していただいている。若い家族連れが来る理由がかなりできたと思う。科学館もでき、さらに来られる理由ができてきたと思う。

こういう図書館に来られる理由を一つつくってもらったので、また商店街のほうで頑張らば、図書館に来られた方に、図書館だけではなくて商店街でまた満足をしてもらえるようなものを商店街が考えていかないといけない。お互いが、相乗効果というのをつくっていかないといけないと思っている。そういう意味で、商店街に来る理由の一つをつくってもらい、本当に感謝をしている。

今後、その理由をどんどん増やしていきたいと思っている。その一つとして、私が委員をしている「まちゼミ」について、オーテピアにも参加してもらっている。商業者ではない団体では、高知城歴史博物館、それから学生の団体も参加している。まちゼミに、オーテピアなどに参加してもらうことで、商業者だけがやってる販促事業ではなく、一緒にその地域の中でいろんな課題を解決するようなコミュニケーション事業、そんな側面が強くなってきたように思う。そういうことを今後また一緒にやっていってもらえたら嬉しい。

まちゼミができたときから、各商店街がやっているまちゼミのテーマの資料を図書館に展示をしてくれている。今もそういう本を展示し、各お店がやっているまちゼミを深掘りできるような資料をコーナーに置いてもらい、非常に助かっている。今後、まちゼミでの活用として、まちゼミでは、各お店のお店の事業主がお客さんを呼んでミニゼミをする。各お店では、いろんな技術とか知識とかを持っているが、お客さんを呼んで自分のとこの技術とかいろんなものを話すとなると、何を話したらいいか、どんなふうに話したらいいか意外と悩まれる。その参加店説明会をやるときに、「ここのお店はこんな資料があるから、こんなものでやってみたらどうか」といった、参加店の説明会のとくにいくつか資料を持ってきてもらい、参考にさせていただく。そういうような今後の関

わりを考えている。

それから、まちゼミをやったときに、こんな関連した資料があるということを確認できれば今後、例えば、事務局をやっている商工会議所、商店街の組合がまとめてその本の管理をし、個々のお店に貸し出しをして、まちゼミに参加した方が図書館に来なくても、まちゼミに参加したときに各お店で本が借りられるといった仕組みみたいなものまで発展できれば嬉しい。

あともう一つ、先日、オーテピア高知図書館で、データベースの検索の仕方についての授業をやっていただいた。参加させてもらったが、非常に楽しかった。例えば、商店街で、「こんな事業所がいくつあって、こんなことをやられてて、こういうのがいくつある」とか、そんなことを検索できる。すごく役に立つ資料が手に入るが、結構、皆さん知らないと思う。

今、商店街で起業される方とか、今までと違うサービスをやりたいというお店にとっては、例えば通行量だけじゃなくて、こんなことをやるにはこんな資料があるんだとか、こんなデータがあるんだということ調べられるのは、非常にプラスになる情報だと思う。そういうものは、例えば高知商工会議所や中央会に行けば、ある程度の資料があるが、自分で検索し、必要な資料が手に入るのは、非常に有効な情報の収集方法と思う。

【分野代表者】

健康・福祉分野で来ています。

健康づくりの分野で、これまでも図書館と連携し、図書の情報発信などでお世話になり、私自身振り返ってみて、図書館のイメージがここ何年かですごく変わったと実感している。

今回、この計画をお聞きし、これまでもさまざまな取組をされており、そして今後、拡充と新たな取組もということで、素晴らしい内容と思う。ただ、この図書館を使っている人、知っている人は、こういったサービスがあったら、さらに使うかと思うが、これまでの私みたいにあまり図書館に触れてこなかった者にとっては、それを知ってもらう機会をつくるのが難しいと感じた。

知ってもらうという実感とか体験をすることが、とても大切かと思っている。健康・安心・防災情報サービスでは、アウトリーチとか行事といった取組を設けており、そういったところで、連携した取組からはじめて、さらに進んで協働、それぞれの立場がそれぞれ主体性を持って互いに協働して取り組むことで、より多くの市民に図書館の利用と高知市の健康づくりということでも発信ができるのかもしれないと感じた。

今日の説明の中で、情報弱者にならない高知県ということについて、委員から話があり、本当にそうだと思った。健康格差という言葉もあるが、やはり知ってる人と知らない人では、選択に大きな差が出てくると思う。今日の話の中でも、こんなにたくさんの方が利用している図書館ということを考えれば、保健所も発信はしているが、今後、図書館と一緒に健康情報の発信の仕方をさらに進める検討ができればありがたいと感じた。

顔の見える関係ということは、この前の意見交換会でも話をしたが、今、顔の見える関係でいろいろと相談させてもらっている。行政支援というサービスがあるが、これまで図書館をうまく活用できてなかった。そういった行政の立場としても、せっかくある

すばらしい情報を行政、健康づくりにうまく活用できるように、今後も健康そのものではなく、健康を展開するために必要な情報も含めて図書館には情報提供をいただきたい。これからも連携させていただきたいと思う。

【分野代表者】

私も図書館の概念がすごく変わった。オーテピアとの付き合いは短く、去年お声がけいただき、図書館の活用講座を職員が何名か受けた。レファレンス・サービスを知らなかったという職員がたくさんいたが、今は活用している。

社会福祉協議会では生活課題の課題解決をする機関というか、困窮や障害とか、高齢によって生活課題がある方を専門機関につないだり、あとは、そういう方が住んでいる地域の中で、その人たちが住みよよいような地域づくりができるようなお手伝いをしている。職員の専門性がすごく大切になってきており、インターネットなどの情報ももちろんあるが、やはり情報の正確さとか信用性というところで、今あらためて、図書館を職員とともに考えている。

私の分野で言えば、福祉の分野になる。課題解決型図書館を掲げ、この図書館にもいろんな課題を抱えた方がいらっしやると思う。連携を強化していこうとする計画になっていると見受けられるが、その連携を強化するには、私たち社協もそうだが、やはりいろんな団体を、オーテピアが知っていくことが必要だと思う。

要は、社協としても、私たちがよく使っていただき、私たちのほうでも、いろんな団体、引きこもりや依存症の支援グループであったり、また市町村の社会福祉協議会やふくし交流プラザ内には県社協がある。そういう私たちのネットワークもどんどん活用していただいて、お互いにその課題解決を目指していきたいと思う。

【分野代表者】

まず、12月に行われました意見交換会で課題として伝えたレファレンス・サービスの充実とか連携という部分については、この計画の骨子案に十分反映されていると思う。

一点、自分から伝えた内容で広報という分野があった。この広報については、先ほどから、委員からいろんなヒントをいただいた。例えば、情報弱者をつくらない。防災の分野では情報弱者が災害弱者に陥る、イコールと言われている。また、地域の課題に応じて一定メリハリをつけて、特徴的なことに取り組んでいく必要もあるといった話も委員からあった。

そういう点で考えると、やはり南海トラフ地震の対策が、防災の分野で言えば、高知の大きな地域性と思う。その中でも、一番よく地域の住民に伝えるのは、まずは命を守る基本的な考え方をしっかり理解したうえで、その次の段階、さらにその下の段階といった形で発展をさせていく。それが図書館の役割であったり、情報リテラシーの向上みたいなところにつながっていく。まず、その一番最初のステージ1については、世代を超えて、ありとあらゆる方が、災害が起こったときに命を守るためにとる行動であったり、そのときに状況判断する本当に基本的な知識であったりする。そこについては、どちらかと言うとリテラシーではなく、強制的に皆さんに知っていただく情報ということで、広報の重要性を伝えた。

例えば児童サービスであったり、ティーンズであったり、いろんな分野で横串というか、対象別ではなくて分野を散りばめて、防災の基本的なところについてはどこかにもう少し短いセンテンスを入れてもらえればと思う。

そのことで、南海トラフ地震でこの高知市だけで 25 年の想定では 1 万人を超える方が亡くなるとされているが、少しでも減って、数千人になったり、数百人まで落とすことができればと思う。自分たちの仕事でもあるが、図書館としても役割を果たしていける地域課題の中でも大きな分野と思う。

【事務局】

各委員そして各分野の代表の方々から、本当に多岐にわたる意見をいただいた。

何点か申し上げる。サービス・取組の体系の見直しを再度する必要があると思う。図書館ならでは情報の出し方、横串の情報流通ということがあったが、図書館に来れば、その分野だけではなく幅広い情報を提供できるということをもっと多くの方に知っていただく必要がある。それは、説明の中でも申し上げたように、オーテピアのウェブ・サイトにいけば何でもあるということだけでなく、プッシュ型の広報というか、広報の仕方自体をもっと工夫をしなくてはいけないと感じる。

それと、今日出席いただいた各代表の方々、この 3 年目で関係を少しずつ構築しつつあるということで、やはりお互いにメリットがあるかたちで連携させていただかないと継続性がないと考えている。そういう意味でも、もっと日常的に顔の見える意見交換をさせていただきたいと思う。

次に、さまざまな方法で行政の方々に使ってもらうためには、一番不足している部分は PR だと思う。やり方についてはさらに検討をして改善していきたい。

次に、司書の専門性の向上の部分で言えば、今回、このサービス計画のバージョンアップを考えるにあたっては、トップダウンで決めたわけではなく、それぞれのサービスの担当が意見交換会やアンケートを踏まえて、自分たちが県、市の課題解決をどうしていくか、どういうサービスが必要なのかということを真摯に考えて組み立てをしている。

中身については磨き上げをしていく必要があると思う。そういった意味では、司書自身も自分の専門性、どの分野を磨いていくべきか、専門性を高めていくべきかということもヒントになったのではないかと思う。

今日は後方に若い司書もたくさん出席して話を聞いているが、さらに自己研鑽に努めてほしいと思う。

【事務局】

専門企画員の担当として、司書の育成が入っており、申し上げる。この 1 年間はひと月に 1 テーマで、日本十進分類法という図書の分類の表があり、その部門ごとに参考図書とかその分野の特徴を説明してきた。ただ単に検索できればいいというものでなく、司書はそういう意味では大変で、私も 30 年以上図書館の司書をしており、概論書は一通り読んだ。そんなところからはじめて、この 1 年間は研修をしたので、来年度はいろんなことに対処できるように、もう少し応用的なこともやっていこうかと思う。

皆さんからの質問で、レファレンス・サービスなどは、オーテピア高知図書館の司書は鍛えられている。あと、グループウェアを図書館で入れているところは、まだ珍しい

と思うが、そのグループウェア上で、レファレンスのディスカッションをしている。外国の図書館はやっていると思うが、他の図書館ではまだ滅多にやってないことをやっている。その効果が出てきている。どんどん答えをアップしてくれている人と、それを裏付けるようほかの人はどんどんフォローして調べてくれる。短い期間の割には、高度成長を遂げてるなとは思っている。

【事務局】

移住について、選ばれる地域であるための図書館のあり方という話があった。県民、市民からすれば、住み続けられる地域であるための図書館とはどういうものなのか、ということにつながっていくと思いき、そういったところを踏まえながら、今後、計画のまためのについて努力していきたい。

【委員】

まだまだご意見を受け賜わるべきだが、時間がない。まだ計画の最終段階ではないので、またご意見を拝聴する機会もあるかと思う。そのときによろしくお願ひしたい。

感想のようなものになるが、この計画全体を見て、一体どういう視点で全体を捉えたらいいのかということを考えていて、ふと思ひ当たったのが、いわゆる「相互信頼」というありかた。図書館が勝手にサービスを提供するわけではなく、利用者が勝手な要求をするというわけでもなく、お互いに相手を信用して共にいい関係を築こうではないか。そのためのサービス計画の作成ということになっているのではないか。そういう視点で、この計画全体を俯瞰的に見たらいいのではないかという気がした。

例えば、IT化というのは重要だが、相互信頼の一番基本で象徴的な意味を持つのがやはり顔の見える形での相談となると思う。例えば、検索時間の縮小、短縮であるとか、そういう技術的な面もあるが、基本はとにかくお互いに相談できる、話し合えるという、そういう相互信頼に基づいた形で、これからサービス計画を進めていくというのが一番大きなポイントではないかと思った。

それから、今一つは、進化型の図書館を目指すわけだが、これは別にハード面だけではなく、時代状況の、特にポストコロナの世の中のあり方というか、文化のあり方、働き方、全部変わってしまうので、その状況に適応していくという意味での進化だと思う。利用者と図書館が、共に手を携えあって進化していこうという方向での進化型の図書館であるべきであろう。そういう方向を目指したサービス計画であるべきではないかと考える。

何度も出てきていた県、市合同の図書館というスタイルは、そもそもたぶん進化を目指した組織のあり方ではなかったらと思う。それをベースにして、共に手と手を携えあって、この困難な状況の中で何とか進化を遂げていこうという方向性のサービス計画であるべきだろうと考える。

それから、あともう一つ、広報との関係がある。オーテピアという名称自体はもうかなり、ある種のブランド的な評価を獲得したとは思っている。次は、これから作成するサービス計画がなるべく多くの機会、特に行政関係とか教育関係、そういう場で話題、議題として取り上げられるようにすべきで、内容に関していろいろ批判をいただくと思

うが、取り上げられないままでは何も起きない。とにかく議論してもらおう。そういう場をできる限りたくさんもってもらえるような広報活動も考えるべきだろうと思う。マスコミに取り上げてもらおう。それから、事あるごとにこういうサービス計画をどう思うか、図書館の利用に関して話し合ったことがあるかを問うなど、図書館の活動自体が話題になるような機会を増やしていく。そういう広報のあり方も考えたらいいと思う。

全体を見渡して言えることは少ないが、そういう一つの視点もあるかと披露した。

それでは、事務局で委員とそれから代表者の方々からいただいた意見を十分に踏まえ、第2次計画の策定、それから図書館運営を進めていくようお願いする。

最後に、議事（3）その他について事務局のほうから。

【事務局】

* 議事（3）「スケジュール」について説明